近代国家を目指す明治期、『西国立志編』『学問のすすめ』と共に、当時一級の知識人、文壇名士、軍人、実業家らが「自助」「学問」「修養」による「立身出世」「成功」を説いた雑誌『成功』が遂に復刻!!

SUCCESS

成功

復刻版

成功雑誌社発行　全32巻・別冊1

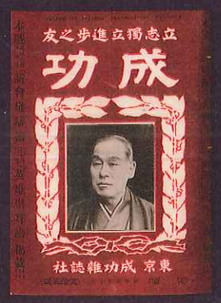
原本発行元＝成功雑誌社▼明治三五年一〇月～大正四年一二月

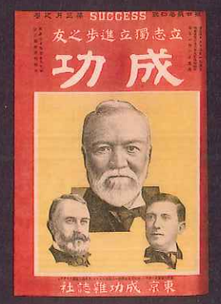
解説＝三上　敦史（北海道教育大学　教授）

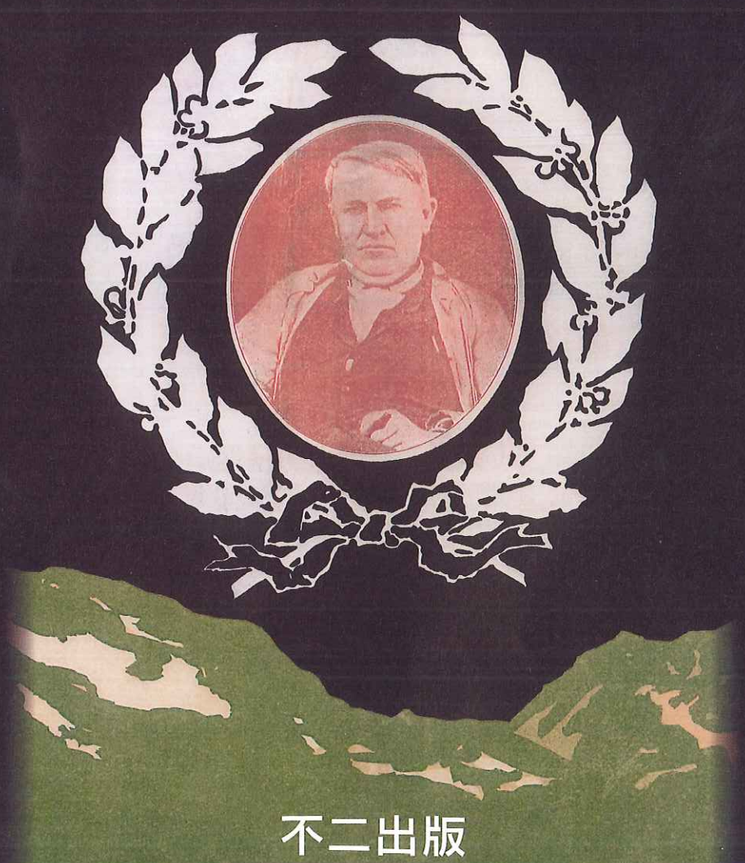
推薦＝寺﨑　昌男・竹内　洋・辻本　雅史・新谷　恭明・菅原　亮芳

配本＝全八回配本▼二〇一四年一一月～二〇一七年三月

定価＝本体揃価格七三六、〇〇〇円＋税







不二出版

復刻版『成功』

全32巻・別冊1

概要

◎体　裁＝B5判／上製／総約20、000頁
◎別　冊＝解説・総目次
※別冊のみ分売可＝本体8、000円＋税　ISBN 978-4-8350-7758-1
◎解　説＝三上　敦史（北海道教育大学教授）
◎推　薦＝寺﨑　昌男（立教学院本部調査役、東京大学・桜美林大学名誉教授）
竹内　洋（関西大学東京センター長）
辻本　雅史（国立台湾大学教授、京都大学名誉教授）
新谷　恭明（九州大学基幹教育院教授）
菅原　亮芳（高崎商科大学教授）
◎定　価＝本体揃価格7 3 6、0 0 0円＋税
◎配　本＝全8回配本（2014年11月～2017年3月）
◎原本提供＝東京大学法学政治学研究科附属明治新聞雑誌文庫・早稲田大学中央図書館　他

◎2014年度合計184、000円＋税

配本	復刻版巻数	原本巻数	原本発行年月
第1回配本	第1巻	第1巻1号～第2巻2号	明治35年10月～36年5月
	第2巻	第2巻3号～第3巻5号	明治36年6月～37年2月
	第3巻	第4巻1号～第5巻4号	明治37年3月～10月
	第4巻	第5巻5号～第7巻1号	明治37年11月～38年7月
第2回配本	第5巻	第7巻2号～第8巻2号	明治38年8月～39年1月
	第6巻	第8巻3号～第9巻3号	明治39年1月～6月
	第7巻	第9巻4号～第10巻4号	明治39年7月～12月
	第8巻	第10巻5号～第11巻5号	明治40年1月～6月
第3回配本	第9巻	第11巻6号～第12巻6号	明治40年7月～12月
	第10巻	第13巻1号～第13巻6号	明治41年1月～5月
	第11巻	第14巻1号～第14巻6号	明治41年6月～10月
	第12巻	第15巻1号～第15巻5号	明治41年11月～42年3月
第4回配本	第13巻	第16巻1号～第16巻5号	明治42年4月～8月
	第14巻	第16巻6号～第17巻4号	明治42年9月～12月
	第15巻	第17巻5号～第18巻2号	明治43年1月～4月
	第16巻	第18巻3号～第19巻1号	明治43年4月～8月
	別冊（解説・総目次）		

配本年月	本体価格
2014年11月	92,000円＋税
2015年3月	92,000円＋税
2015年7月	92,000円＋税
2015年11月	92,000円＋税

8350-7717-8
8350-7722-2
8350-7727-7
8350-7732-1

◎2015年度合計276、000円＋税

配本	復刻版巻数	原本巻数	原本発行年月
第5回配本	第17巻	第19巻2号～第19巻4号	明治43年9月～10月
	第18巻	第19巻5号～第20巻2号	明治43年11月～44年2月
	第19巻	第20巻3号～第20巻6号	明治44年3月～6月
	第20巻	第21巻1号～第21巻4号	明治44年7月～10月
第6回配本	第21巻	第21巻5号～第22巻1号	明治44年10月～12月
	第22巻	第22巻2号～第22巻5号	明治45年1月～4月
	第23巻	第23巻3号～第23巻6号	明治45年4月～7月
	第24巻	第23巻4号～第24巻1号	大正元年8月～10月
第7回配本	第25巻	第24巻2号～第24巻6号	大正元年11月～2年3月
	第26巻	第25巻1号～第25巻5号	大正2年4月～8月
	第27巻	第25巻6号～第26巻3号	大正2年9月～12月
	第28巻	第26巻4号～第27巻1号	大正3年1月～4月
第8回配本	第29巻	第27巻2号～第27巻5号	大正3年5月～8月
	第30巻	第27巻6号～第28巻3号	大正3年9月～12月
	第31巻	第28巻4号～第29巻4号	大正4年1月～7月
	第32巻	第29巻5号～第30巻3号	大正4年8月～12月

配本年月	本体価格
2016年3月	92,000円＋税
2016年7月	92,000円＋税
2016年11月	92,000円＋税
2017年3月	92,000円＋税

8350-7738-3
8350-7743-7
8350-7748-2
8350-7753-6

◎2016年度合計276、000円＋税

※価格下の数字はISBNを示し、頭に「978-4-」が付きます。

不二出版
〒113-0023
東京都文京区向丘1-2-12
電話03-3812-4433
ファクシミリ03-3812-4464
振替00160-2-94084

●表示価格はすべて税別。

表1中央の写真は、トーマス・エジソン『成功』第5巻第4号（明治37年10月）より。

雑誌『成功』は、明治三五（一九〇二）年に創刊され大正五（一九一六）年まで、エリート路線から外れた青少年・苦学生を主たる読者対象とし、成功雑誌社より刊行された月刊誌である。当時アメリカでは、オリソン・マーデンによる『サクセス』（"success"、一八九七年創刊）が五十万部の部数を誇り、『フォーブス』等と並んでビジネス五大雑誌の一つと言われていた。本誌はその『サクセス』の日本語版を作成したいと志した村上俊蔵により刊行されたものである。

当時の日本では、明治政府による近代化政策により居住の自由、職業選択の自由が法的に保障され、人々の立身出世に対する意欲が一気に噴出した。明治三年にスマイルズの『自助論』（Samuel Smiles "Self Help"）が『西国立志編』として刊行され、明治五年には福澤諭吉の『学問のすすめ』が刊行され、圧倒的な支持を受けて読まれ続けた。本誌は、日露戦争開戦の二年前に刊行が開始され、前二誌同様「自助」「立志」「修養」による「成功」「立身出世」について、当時一級の知識人、文壇名士、軍人、実業家等が寄稿している。夏目漱石の小説『門』では、主人公・野中宗助が歯科医の待合室で本誌を手に取る場面が描かれていることからも、相当な浸透ぶりであったことがうかがえる。また、目次頁では大きく「現代活躍を欲する者は必ず本誌を読め!!!」と謳っており、刊行関係者の自信が垣間見られる。

内容も多岐に渡っており、時折「文学号」「宗教号」「英雄号」といった特集が組まれたり、「戦後職業案内」「現代読書法」といった臨時増刊号が刊行されたりと、様々な角度から若者への人生指針を投げかけている。また各号に『サクセス』からの引用記事が英文と和文で掲載されており、当時アメリカで流行した通俗哲学がどのようなものかも知ることができる。

しかし本誌を揃いで所蔵している研究機関は全くない。一部所蔵が全国で数カ所という稀覯な資料であり、今回諸研究機関の協力のもとほぼ全巻揃いで復刻に至った次第である。

帝国日本の教育システムが、初等レベルから高等レベルにわたって確立と普及を遂げた時代に刊行された本誌の復刻により、当時の若者達の間にあった目に見えない「時代の空気」とは何か、近代教育体制の確立が成功した理由とは何かを解き明かす為の一助になるものと信じ復刻刊行するものである。

不二出版

復刻の辞

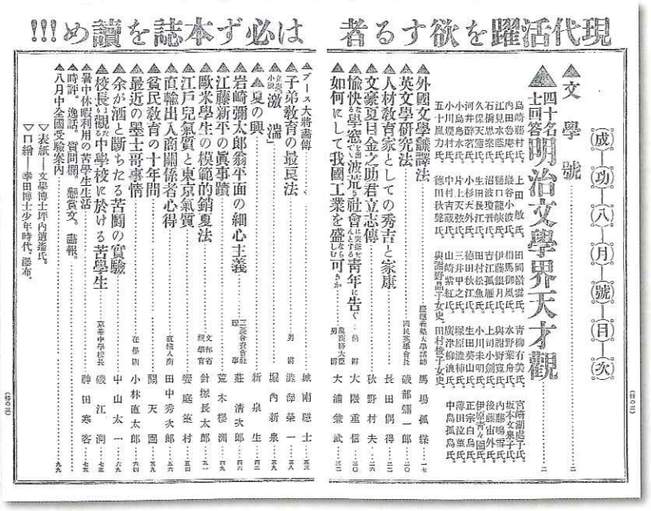
『成功』の本領

一、自助的人物たらんとするものは本誌に来れ
一、品性を陶冶せんとするものは本誌に来れ
一、處世の法を知らんとするものは本誌に来れ
一、職業の選擇法を知らんとするものは本誌に来れ
一、修學の方針を知らんとするものは本誌に来れ
一、海外に活動せんとするものは本誌に来れ
一、苦學の方法を知らんとするものは本誌に来れ
一、學校の選擇愛驗の方法を知らんとするものは本誌に来れ

『成功』主要執筆者一覧

有馬　新一
A　カーネギー
石井　研堂
泉　鏡花
板垣　退助
伊藤　博文
犬養　毅
井上　圓了
井上　哲次郎
巌本　善治
浮田　和民
内田　良平
内田　魯庵
内村　鑑三
海老名　彈正
大隈　重信
大倉　喜八郎
尾崎　行雄
オリソン　マーデン
嘉悦　孝子
片山　潜
鎌田　榮吉
嘉納　治五郎
河口　慧海
川面　凡児
郡司　成忠
幸田　露伴
幸徳　秋水
児玉　花外
後藤　新平
志賀　重昂
澁澤　榮一
島崎　藤村
島田　三郎
島貫　兵太夫
下田　二郎
高田　早苗
高橋　是清
高濱　虚子
田口　卯吉
棚橋　一朗
棚橋　絢子
田村　俊子
津田　梅子
頭山　満
徳田　秋聲
徳富　猪一郎
留岡　幸助
夏目　漱石
生江　孝之
成瀬　仁藏
新渡戸　稲造
乃木　希典
野口　米次郎
平沼　騏一郎
廣池　千九郎
廣田　弘毅
福澤　桃助
福本　日南
二葉亭　四迷
ヘレン　ケラー
本多　庸一
前田　慧雲
正宗　白鳥
松岡　洋右
松村　介石
三宅　雪嶺
宮崎　滔天
村上　濁浪
村上　専精
元良　勇次郎
元田　作之進
安田　善次郎
山室　軍平
與謝野　晶子
與謝野　鐵幹
吉岡　彌生

推薦の言葉


現代活躍を欲する者は必ず本誌を讀め!!!

成功號

▲文學號
▲四十名士回答明治文學界天才觀……
▲外國文學論譯法……
▲英文學研究法……
▲人材教育家としての秀吉と家康……
▲文豪夏目金之助君立志傳……
▲愉快な學窓を流れる青年と告ぐ……
▲如何にして我國工業を盛しむ可きか……
▲ブース大將講演……
▲子弟教育の最長法……
▲激濤……
▲臭の興……
▲岩崎彌太郎翁平面の細心主義……
▲江藤新平の眞事蹟……
▲歐米學生の模範的銷夏法……
▲江戸兒氣質と東京氣質……
▲直輸出入商關係者心得……
▲貧民教育の十年間……
▲最近の墨士哥學情……
▲余が酒と斷ちたる苦闘の實驗……
▲校長が親の中學校に於ける苦學生……
▲暑中休暇利用の苦學生活……
▲時評、逸話、質問欄、懸賞文、畫報……
▲八月中金國受驗案内……
▽表紙……文學博士坪内逍遥氏
▽口繪……帝国陸士少年時代　陸軍

「記者と読者」欄が貴重な資料

竹内　洋（関西大学東京センター長）

いまから四十年ほど前、わたしは立身出世主義を研究しようと思いたった。しかし、立身出世主義は表象であり、具体的な資料をとっかかりにして解明する以外にない。立身出世（成功）読本と雑誌『成功』を手がかりとすることにした。国会図書館や東京大学の明治新聞雑誌文庫などに通った。『成功』という題名から、教唆雑誌というハウツー雑誌かと思ったが、さにあらず、『西国立志編』を典拠にした堂々たる社会・人生論雑誌でもあった。初期の『成功』には社会主義者の成功演説や『平民之友』などが紹介され、また西川光次郎なども寄稿していたのである。

さらにみていくと、これはよい資料になると思えてきた。『成功』には論説だけではなく、「記者と読者」欄が常設されていたからである。論説はオピニオン・メーカーの成功言説であるが、読者投稿欄から当時の読者たちの成功をめぐる意識を垣間見ることができるからである。小学校時代の友人が進学していくのをみて自暴自棄になったり、どこの学校を卒業したら月給がいくらになるかなどの読者からの膨大な質問をみていくことは、人々の成功観にとどまらず、当時の民衆意識の恰好の資料となる。もう一度「記者と読書」欄を読み返したいと思っていたから、わたしにとってもこの復刻版はありがたい。『成功』の論説と「記者と読者」欄の呼応、食い違いなどをみていくことで時代の空気や気分を解読する手立てが得られること必定である。

近代日本教育史研究の未開拓領域の解明のための一鍬

菅原　亮芳（高崎商科大学教授）

教育関係ジャーナリズムと言えば、教師を読者層とする多種多様な教育雑誌、あるいは家庭向け幼少年向け雑誌が主であり、教育史研究の対象となったのもそれらの雑誌であった。

それらのなかに置いてみると、雑誌『成功』は、「教育関係雑誌」の枠外に置かれるものかもしれない。加えて「学校における学習」を「学び」の主軸と見れば、本雑誌は、その周辺にある副次的なメディアに過ぎない。

しかし、筆者は、この雑誌が独自の意味をもつ教育メディアであることに着目したい。このメディアを利用して研究する者たちは、雑誌『成功』を正面に据え、『成功』という雑誌メディアの「顔」を解明しつつ、『成功』が提供する情報を種々の行動に即応し、いかなる情報が青年たちのもとに届けられたかを総合的に確かめる仕事になろう。

このような作業は、同時に、その言説・情報によって、青年の「学び」と職業選択がどのような影響を受けたかを明らかにでき、その好箇のメディアこそが雑誌『成功』であるということがいえよう。

雑誌『成功』の主なる読者対象は、正規の「学校」外で「学ぶ」青年たちである。雑誌『成功』の研究は、そのような青年たちの意欲と志とを動機として近代日本の青年の「学び」の全体的構造史を解明できる一助となるであろう。

また、青年たちの「学び」の意欲と志は、どのように形成され、方向づけられてきたか。その歴史的過程を明らかにすることは、近代日本教育史の未開拓の領域を解明することにもなる。この雑誌メディアの復刻を慶びたい。

『成功』内容見本

發刊之辭

今日の社會に要する人物は、巧言令色を以て人に接し、而も自ら保つの節操なき、所謂當世的才子にもあらず、蓬頭亂髪無禮無作法にして、好んで壯言大語し、而も中に摯實の工夫を缺く、所謂東洋的豪傑にもあらず、只自ら助け自ら重んじ、自ら營營し、自ら勤勞し、自己の手腕を以て自己の運命を作り出す人物にあり

倩案ずるに、國家は斯る人物の存在に因つて興り、斯る人物の缺乏に因つて衰ふ、之を以て歐米諸國人の意を此種の人物の養成に注ぐや深く、學者宗教家より、政治家實業家に至るまで、其著書に、其雜誌に、盛に之を奬勵し、日も尚足らざるの觀あるなり

然るに翻つて我國の現狀を見は如何、彼の中村敬宇先生の西國立志編等、二三青年の爲めにせし著譯なきにあらざるも、其著書の乏しき、恰も茫々たる沙漠に寸草をも見ざるの觀あり、殊に雜誌界に至りては滔々たる天下、只讀者の顏色を損せざらんことを是努め徒に淫詞を列し、浮文を載せ、以て江湖有爲の青年を害せんとす、

噫我が社會は之を以て滿足すべきか、我日本は別に清新剛健なる刊行物の必要を感ぜざる耶、余輩不敏と雖とも、常に青年の伴侶を以て任する者、如何ぞ爲めに秃筆を呵し、此晴儻たる天地に一道の光明を點ずるを思はざらんや、

雜誌成功は、只此要求を滿さんが爲めに發刊せんとする物なり、微力敢て天下を風靡するに足らずと雖ども、又獨立獨歩、明白に其所思を言ひ、其所信を斷行するの點に於て、大に他に勝れるものあるを信ず、

明治三十五年十月

編輯主任　村上濁浪

発刊の辞　第１巻第１号（明治35年10月10日）より

162　32

普通人の職業撰擇法

The Average Man's Vocation

The geniuses of the world are outnumbered by the commonplace men; as, in a grainfield, the flowers are outnumbered by the wheat ears. Where is the place for the average man? To answer in a sentence, it is where he can use his strength and intelligence to the best advantage, and *enjoy doing it.*

"Study yourself," says Longfellow, and, most of all note well wherein kind nature meant you to excel."

Dr. Mathews says that "to no other cause, perhaps, in failure in life so frequently to be traced as to a mistaken calling." Those who fail are, as a rule, those who are out of their places. A man out of his place is but half a man; his very nature is perverted. He is working against his inclinations, rowing against the current, and it is only a question of time when he will fail. When his strength is exhausted, he will float down the stream. A man cannot succeed when his whole nature is entering its perpetual protest against his occupation. To succeed, his vocation must have the consent of all his faculties; they must be in harmony with his purpose.

The best way to choose an occupation is to ask yourself the question, "What would my fellows do with me if they were to consider my qualifications and adaptations, and place me to the best possible advantage to themselves?" The Norwegian precept is a good one: "Give thyself wholly to thy fellow-men; they will give thee back soon enough." We can do the most possible for ourselves when we are in a position where we can do the most possible for others. We are doing the most for ourselves and for others when we are in a position which calls into play in the highest possible way the greatest number of our best faculties; in other words, we are succeeding best for ourselves when we are succeeding best for others. We have no right to choose our occupation from a selfish standpoint. When we cheat others we are cheating ourselves. (success)

世界の天才は普通人の數よりは少なし、英國は恰も穀物畑にて花の數の小麥の穗よりも少きが如し、然らば何れの處にか普通人の適當はあるや、答し一語の法言に於て之に答へんとならば、思慮は自己が自己の氣力と知力とを最上高度に應用し盡みつゝ之を行ひ得る場所にありと謂へし。

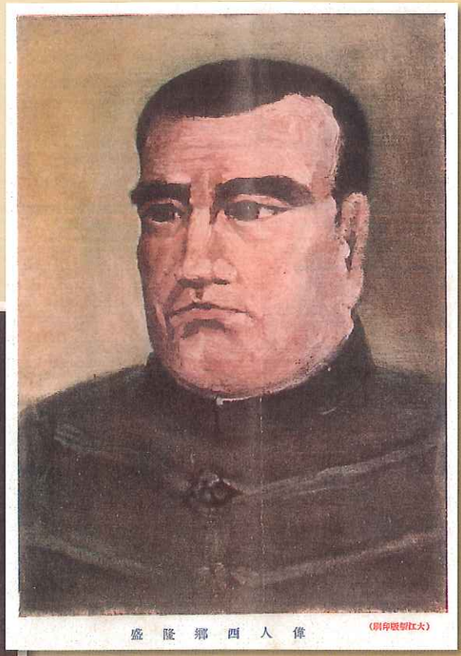
ロンガフエロー曰く汝自身を研究せよ、而して必發して其天性が如何なる問題の事に適せんと欲するやを發く確認せよと。

マツシユー博士曰く世上に悲しむる所の生涯に於ける失敗は大抵職業の選擇を誤りしに基因すと、思ふに彼の失敗者を見るに概ね一定の規則として、其者は自己の適性にあらざる事を爲し居れり、若し適性外の事を爲さしむれば人は半人前にしか働用せず、其天性は非常に發出を妨害さる、猶ほ思ふに自己が責任の指向に反して働き、潮流に逆つて漕ぐ者は到底成功の見込なし、其失敗は必然にして只時に多少の遲速あるのみ、完全適性の境には早晩必ずや下降を免れず、人は自己の性質が自己の適業に適し居らざる場合には到底成功するを得ざるなり、若し成功せんとすれば其職業は其方能に深く適合したるものならざるべからざると共に又自分にも適合し居らざるべからざるなり。

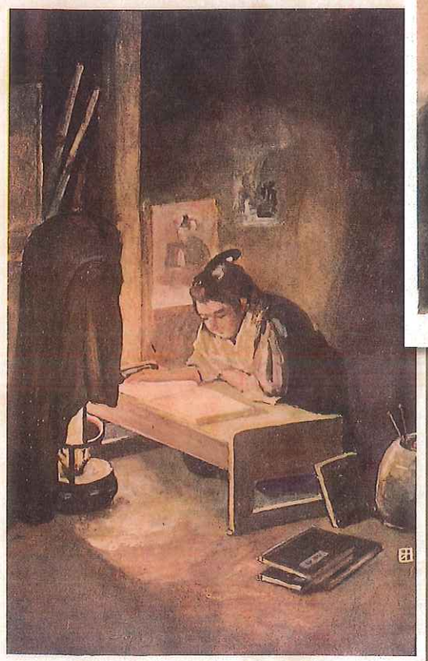
職業撰擇の最良法としては下の如き箴言を銘肝に感じ見る事必要なり〔人力若し能ふ才能を等へ、彼を採用し其人に取り最も有益に彼を用ゐんとならば其人は果して彼を如何なる職業に採用すべき〕と、此勸告を自ら感じ見て我が撰擇すべき職業は必ず我が能に適合し得る人ノルエー人の教訓に「先づ全然隣人に與へよ、然らば隣人も亦直に汝に與へんと」、余輩は實に他者に對して最上の事を爲し得るなり、己の最上能力の最大發を最高程度に發かし得る國際にある時に於て初めて自己の爲めにも他者の爲めにも最大の事を爲し得るなり、換言すれば他者に對し最上に成功し得る際には自己に對しても最上に成功し得るなり、余輩は鈍怪なる立脚點より職業を撰擇するの値なき者ゝ、他者を欺くあれば又自らをも欺く事と爲ればなり。

普通人の職業選択法　第６巻第３号（明治38年３月１日）より

臨時増刊明治文明号　第24巻第１号（大正元年10月10日）より



西郷隆盛　第19巻第１号（明治43年８月１日）より



賴山陽少年時代

賴山陽少年時代　第19巻第５号（明治43年11月１日）より

旅順口大海戦　第４巻第１号（明治37年３月１日）より

推薦の言葉

若者が夢をもって生きた時代の証言者

新谷 恭明（九州大学基幹教育院教授）

日本の近代は立身出世の志を抱く青年のエネルギーによって支えられたと言ってもよい。古い身分の枠を打ち破り、田舎から都市へ、地方から中央へ、若者はあらゆる前近代的な柵から自らを解き放ち、功成り名を遂げることを夢見たのであろう。日本の社会が大きく展開していく二十世紀初頭にあって、そのような若者たちの「立志独立進歩之友」として彼らを励まし、元気づけたのが雑誌『成功』であった。

『成功』はまさしく二十世紀初頭の明治三十五年から大正五年までのおよそ十五年間ほどしか刊行はされなかった。しかし、この時期に義務教育への就学率は急上昇し、中等教育は拡張し、高等教育もまた実質的に広がりを見せていく時期であり、立身出世を目指す若者にとっては夢が現実へと転換するにじゅうぶんな社会的インフラが整備されつつあったのである。『成功』はそうした時代を背景に若者たちによく読まれたのだが、それにはそれだけの意味があったのである。『成功』を手にとって頁を捲れば、洋の東西を問わない成功譚と成功への訣等の記事が満載されている。また、特別賛成員として名を連ねている幸田露伴、巌本善治、徳富猪一郎（蘇峰）、村上専精、井上円了、志賀重昂の六名はいずれも気鋭の知識人であり、三十名近い名誉賛成員の面々も当代一流の名士であって、若者たちが憧れたであろう人士であった。当時の若者たちが胸をときめかせて読んだであろうことは想像に難くない。『成功』は教育史研究、殊に中等教育史、青年教育史といった領域の研究者にとっては欠かせない史料であるが、それ以上に日本の若者が夢をもって生きていた時代の証言者でもある。それが全巻揃って復刻されるのはたいへん喜ばしいことである。

「見えない」教育史研究の新たな可能性

辻本 雅史（国立台湾大学教授、京都大学名誉教授）

日本近代化の逸早い達成に教育の果たした役割は限りなく大きい。明治維新以後、半世紀足らずで「国民皆教育」はほぼ達成され、高等教育さらに中等教育の教育体系が整備されていった。教育史研究は、近代教育体制が、国家的求心力をもつ勤勉な「国民」の形成と、近代化を牽引する人材輩出に貢献してきた詳細な事実を明らかにし、その結果、国家と教育の「見える」関係を解明した。

しかしなぜ日本の教育は「成功」したのか。この問いに応えるには、教育を下支えする「見えない」力の存在に気付く必要がある。封建的身分制廃止後、社会階層秩序の構成原理は学歴や個人の力量に変わった。学びのうちに組み込まれた成功への回路。その回路に向けた学びの熱情こそ、近代化を根っこのところで支える国民的エネルギーであった。学資を欠く若者たちの夢は、「大学講義録」や「中学講義録」の通信教育で学ぶ学生の姿に見出せる。正規学生の何倍もの学ぶ若者たちが、確かにそこにいた。

日露戦争前から第一次大戦期、まさに日本近代化達成期に発行された雑誌『成功』は、「講義録」の独学に重なる学びへの情熱で溢れている。教育体系の周縁部で燃え上がる若者の「学び」と「成功」への渇望こそ、日本の近代化を下から支え、教育を上に押し上げていった。これまで教育史は、制度化されない「見えない」歴史研究は得意でなかった。今回の雑誌『成功』の復刻は、「見える」歴史にする格好の史料である。新たな教育史研究の出現を期待する。

推薦の言葉

復刻をよろこぶ

寺崎 昌男（立教学院本部調査役、東京大学・桜美林大学名誉教授）

かつて新渡戸稲造の言葉を検索していたころ、『成功』をよく手に取った。稲造は、高等教育進学に縁の薄い青年たちに「修養」と「教養」を説く論説をしばしば寄稿していたからである。大学院で教えるようになってから、本誌を研究対象に取り上げる院生や留学生諸君と交流する機会にも出会った。彼らが興味を持ったのは、本誌が明確なメッセージを発信し続けたからである。明治の末から大正の半ばにかけて、日本の青年たちに「成功」という新しい言葉を提示して見せ、それにまつわる逸話やモラル、規範や教訓を一〇〇％肯定的に伝えた。文字通り裸一貫で刊行を開始し、主筆をつとめた村上俊蔵という人間の生きざまに対しても、若い研究者たちは興味を引かれた様子であった。

『成功』が迎えられた時代は、帝国日本が「大国化」と制度的確立を遂げるとともに教育システムが初等レベルから高等レベルにわたって確立と普及を遂げた時代である。その間の十数年間、このメディアはどのような「時代の声」を伝えたか、またこの雑誌が社会のなかに醸し出した「空気」は何だったか。

雑誌『成功』は、主として中等教育までは進学機会をもちながらも大学や専門学校までは進めなかった青年たちに「自助」と「立志」を説いた。高学歴に頼らない「自助」はどうすれば可能か、閉塞しつつある時代の「志」は何を指すものか。本誌が満載した記事や論説は青年たちのこうした疑問に対して、多様な答えを提供したのであろう。貴重な役割を果たした豊かなリソースが、復刻されて身近なものになる。たいへんうれしく思う。

関連図書〈復刻版〉のご案内

日本力行会＝発行
大正二年～昭和二〇年
力行世界 全39巻・別冊1
体裁▼A5判・B5判・B4判／上製本／総約20、500頁
別冊▼解説（和田敦彦）／総目次／索引
（別冊分売価格3、000円＋税）
推薦▼飯田耕二郎／根川幸男／日比嘉高／平井廣一
刊行▼2012年11月～2015年2月
価格▼762、000円＋税

『力行世界』は、一九一三年より現在も刊行中の日本力行会機関誌である。日本力行会は一八九七年、キリスト教徒であった烏賊川浩貫兵太夫が苦学生救済・海外発展の必要性を唱えるために設立された。『力行世界』は、世界各地に在住する会員の声、移民を希望している人との問答、渡航の方法等、移民に関する記事を豊富に提供する「移民情報の宝庫」であるが、揃いで所蔵している研究機関は皆無であり、容易に入手できなかった。移民史をはじめキリスト教史、教育史、広く近現代史研究に供するものである。

東京基督教女子青年会＝発行
大正一五年～昭和一四年
地の塩 全7巻・別冊1
体裁▼B4判・A5判／上製本／総約2、800頁
別冊▼解説（樽松かほる・影山礼子）／総目次／索引
（別冊分売価格1、800円＋税）
推薦▼川戸れい子
刊行▼2014年5月・12月
価格▼140、000円＋税

『地の塩』は、一九二六年東京基督教女子青年会（東京YWCA）の機関誌として一九三九年まで発行され、その後日本基督教女子青年会（日本YWCA）機関誌『女子青年会』に統合された。日本YWCAが創立したのは一九〇五年、東京YWCAはその年の一一月であり、各都市のYWCAの中で最も歴史が古い。初代会長は津田梅子で、その活動は寄宿舎、保養所、生涯学習講座、国際交流キャンプ、駿河台女学院等多岐に渡る。

現在『地の塩』は東京YWCAの他に所蔵を確認できていない極めて貴重な資料であり、キリスト教史、女性史、教育史等研究に供するものである。

中央報徳会・日本青年館ほか＝発行
大正五年～昭和二〇年
『帝國青年』『青年』 全48リール・別冊1
体裁▼マイクロフィルム版
（35ミリポジティブ・ロールフィルム）
別冊▼解説（多仁照廣）／総目次／索引
（別冊分売価格5、000円＋税）
推薦▼上野景三／小里貞利／菅原亮芳／渡邊洋子
刊行▼2006年7月・2007年1月
価格▼1、000、000円＋税

『帝國青年』は中央報徳会の機関誌として、同青年部より発行された。後に誌名を『青年』と変え、発行所も日本青年館・大日本連合青年団・大日本青少年団本部と変遷しつつ、当時の青年の修養・覚悟・態度等を論じ、戦時体制下には、農村青年と戦争について指導性を発揮する記事を掲載するなど、青年団活動の情報を提供し、当時の青年層に大きな影響を与えた。

近代日本の社会教育史の歩みを体現する、五万頁にも及ぶ本誌をマイクロフィルム版にて刊行。

秋山定輔＝主宰
明治二六年～明治四二年
二六新報 全48巻
体裁▼B4判／上製本／総約18、000頁
推薦▼飛鳥井雅道／荒瀬豊／姜在彦／山本武利
刊行▼1992年6月～1996年6月
価格▼960、000円＋税

『二六新報』は、秋山定輔が二六歳のとき明治二六年に創刊された日刊紙である。藩閥政治反対を唱え、朝鮮問題や中国の動向に注目した独立の政論新聞であったが、いったん経営難から休刊した。

明治三三年、再興された『二六新報』は、三井財閥攻撃・娼妓自由廃業支援・労働者懇親会の開催など社会問題のキャンペーンに重点をおき、紙面を大衆向けに面白くし、かつ廉価販売によって、全盛時代には『万朝報』を抑え最高一八万部を発行した。